

コーカンド・ハーン国史としての『選史』

Muntakhab al-tawārikh as a Historical Source of the Khanate of Khoqand

河 原 弥 生

Yayoi KAWAHARA

Abstract This paper discusses the character and the value of *Muntakhab al-tawārikh* written in Persian by Muḥammad Ḥakīm Khān in 1259 A. H. (1843 C. E.) as a historical source of the Khanate of Khoqand, which, being sometimes categorized as a private memoir or an autobiography of the author, had not been evaluated appropriately, because of the author's utter hostility towards his cousin and the ruler at the time, Muḥammad 'Alī Khān, who exiled him abroad.

He was one of the descendants of Ishāq Walī Khān, the son of Makhdūm-i A'zam, the prominent master of Naqshbandiyya in the 16th century. His clan migrated to the Ferghana Valley in the first half of the 18th century and, through establishing a kinship with the khans of Khoqand, held high-ranking religious positions in the administration. It was not only because he was the son of a khan's daughter, but also because his family history was parallel to that of the khanate that he had sufficient information and motivation to write the history of Khoqand. Another motivating factor behind him writing this material was that he had the invaluable experience of meeting with the rulers of many countries and regions during his pilgrimage to Mecca after being exiled by Muḥammad 'Alī Khān.

Muntakhab al-tawārikh is a "selected" history as is shown in the title. The author copied the description from *Nafā'is al-funūn fī 'arāyis al-'uyūn* almost verbatim to edit the first part of the history, from the beginning, including the preface, to the seventh part of the fifth chapter. Similarly, he referred to *Ta'rikh-i Rāqimī*, *Ta'rikh-i Muqīm khānī*, and some unknown historical materials to edit the histories of the Timurid, Mughals, Shibaniid, and Ashtarkhanid dynasties. The histories of the Manqits of Bukhara and Mings of Khoqand are the original information based on the oral history accounts of persons close to him who were involved in the events. So, the purpose of his writing needs to be examined not based on the preface but on the contents of this original part.

Muḥammad Ḥakīm khān edited his selected history in 1258 A. H. (12th February 1842 to 31st January 1843 C. E.), the year when Muḥammad 'Alī Khān was killed by Amīr Naṣr Allāh of Bukhara and Khoqand was annexed by the Amirate of Bukhara. That is why the author started to describe the beginning of the history of the Khanate of Khoqand using the past tense, as if referring to a fallen dynasty. The essential reason behind the harsh criticism of Muḥammad 'Alī Khān was that the author attributed the cause of the destruction of the Khanate to him. So, the purpose of the writing must have been to overview the entire history of the ruined Khanate of Khoqand.

Thus, as the original and vivid description that had received consistent recognition from the perspective of religious values, followed with the account of an amazing pilgrimage, gained the appreciation of readers, many copies of the manuscript were made and it was even translated into Chaghatay Turkic.

Keywords *Muntakhab al-tawārikh* (『選史』), the Khanate of Khoqand (コーカンド・ハーン国), the Amirate of Bukhara (ブハラ・アミール国), the Ferghana Valley (フェルガナ盆地), Naqshbandiyya (ナクシュバンディヤー)

は じ め に

ムハンマド・ハキーム・ハーン Muḥammad Ḥakīm Khān 著『選史 *Muntakhab al-tawārikh*』(1843年完成)¹⁾ は、ペルシア語による浩瀚な歴史書であり、18世紀から19世紀前半にかけての中央アジア史に関する代表的な史料の一つである。

本書の主要部分であるコーカンド・ハーン国史(第5章第12節)は、貴重な情報を多く含み、これに比肩する同時代史料が存在しないことから中央アジア史研究において早くから注目されてきた。そのため、本書に関しては一定の研究蓄積がある。すでにロシア帝国期にナリフキンが『コーカンド・ハーン国簡史』の執筆のための史料としたのをはじめ[Nalivkin 1886: 1-2]、その後の多くのコーカンド・ハーン国史研究に利用されてきた[Khurshut 1985]。また、同節に含まれるマッカ旅行記がチャグタイ語訳写本から現代ウズベク語に翻字されて出版されるなど、ウズベク文学研究の分野においても重視されてきた[Hakimxon 1966]。本書のドシャンベ写本のファクシミリがムフタロフによる解題と索引を付せられて出版されると本書の研究は飛躍的に進展し[MT-D1; MT-D2]、フルシュトは主にタシケントに所蔵される諸写本を利用して本格的な史料研究を発表した[Khurshut 1984, 1985, 1986a, 1986b, 1988]。フルシュトはさらに、旅行記を簡単な解説を交えて抄訳し²⁾、本書におけるアフガニスタン史関連情報も抽出している[Khurshut 1989]。近年、ベイセンビエフは、コーカンド・ハーン国の諸史料の網羅的な研究を行い、本書と他の諸史料の異同を詳細に解明した[Beisembiev 2009]。また、筆者は『選史』の全文の校訂テキストを出版し、写本の筆写系統について検討を加えた[MT1; MT2]。これらの研究によって、当該時代の中央アジア史が詳細に知られたのはもとより、『選史』にはペルシア語6写本とチャグタイ語訳4写本が現存すること、宮廷史家による君主称賛のための王朝史ではなく、同時代史は口承情報と目撃談から成ること、文学史上も貴重な情報源であることが確認された。しかし他方で、ナクシュバンディーヤに属する著者の家系についてタリーカ研究の視点から検討されることはなく、著者の経歴についても訪問地に関する初歩的な誤りさえ散見される。また、いわゆる「普遍史」³⁾の体裁をとる本書の執筆のために著者が利用した史書は

1) 本稿では、筆者がかつて『選史』のサンクトペテルブルグC470写本[MT-S]を底本としてタシケント592写本[MT-T592]およびドシャンベ写本[MT-D1; MT-D2]と照合して確定した校訂テキストを用いる[MT1; MT2]。ただし、写本間の相違について論じる場合にはこの限りではない。これら3写本は作品完成後間もない1843-44年に筆写された最も重要な写本であり、他の写本は全てコーカンド・ハーン国滅亡後の1877年以降に作成されたものである[MT2: xvi-xxi]。

2) ただし、この書籍は註のない一般読者向けの出版物である[Khurshut 1987]。

3) 本稿では、天地創造やアダム誕生から始まり、イスラーム以前の時代も含めつつムハンマド以降のイスラーム時代を叙述する、旧ソ連圏ではロシア語で「普遍史 *vseobshchaia istoriia*」と分類される歴史書のジャンルを「普遍史」と呼ぶ。ペルシア語文化圏におけるこのジャンルの歴史叙述全般については[大塚 2017]を参照せよ。

明らかにされず、作品の全体像について考察されることはなかった。コーカンド・ハーン国史についても、著者を国外追放に処した君主ムハンマド・アリー・ハーン Muḥammad 'Alī Khān（在位 1822～1842 年）を酷評していることから、私的な回想録の性格を持つとみなされ、コーカンド・ハーン国の諸史料の間で適切に位置付けられて利用されてきたとは言い難い⁴⁾。すなわち、著者自身の執筆の目的や、著者がいかなるコーカンド・ハーン国史を構想したのかなどの史料研究における基本的な問題は、未だ顧みられていないのである。

コーカンド・ハーン国は、フェルガナ盆地を本拠地とした「ウズベク三ハーン国」の一つである⁵⁾。18 世紀初頭にウズベクのミン Ming 部族が現れてフェルガナ盆地の政権を掌握し、1876 年にロシア帝国に併合されて滅ぶまで、露清間の中継貿易で得た経済力を背景にカザフ草原にも版図を拡大して繁栄した。19 世紀初めの最盛期には軍事力においても文化水準においてもブハラ・アミール国を凌ぐ勢力であったが、国家機構のみならず初期の君主たちの統治期間さえ十分に解明されていないのは⁶⁾、原典史料の基礎研究が不十分であることにも起因している。

本稿では、このような問題意識から『選史』のコーカンド・ハーン国史としての性格と位置付けについて検討する。その手順として、まず著者の出自と経歴を再考し、どのような立場から本書を執筆したのかを明らかにする。次に、著者が作品全体の執筆に利用した歴史史料と情報源を整理して『選史』の目次構成の理由や執筆のプロセスを明らかにし、オリジナル部分を特定する。最後に、著者がいつどのような状況下で本書を執筆したのかを検証し、本書の特徴と史料価値を明らかにする。

4) ベイセンビエフは、『選史』は中央アジアの歴史研究にとって非常に重要な史料であるとしつつも、本書には「作者の高い地位と富と故郷を奪ったムハンマド・アリー・ハーンへの憎悪が込められている。このため、『選史』はコーカンドの歴史学において非公式な史料に分類されるはずである」と述べる [Beisembiev 2009: 107]。フルシュトは『選史』のジャンルを普遍史と位置付けるが [Khurshut 1984: 43]、各所蔵機関の写本カタログではコーカンド史または中央アジア史に分類され、「ジャンルとしては、普遍史と地域史と回想録（旅行記）の三つを併せ持つ混ざり合った性格を持つ」[Miklukho-Maklai 1975: 326]、「自伝作品」[SVR-1: 88]、「歴史的、回想録的な文学作品」[SVR-i: 195]と説明されるように、作品の評価が定まっていないことが窺える。

5) この王朝において対外的にハーンを称したのはアーリム・ハーンからであるとされ、この時から正式にコーカンド・ハーン国になったとみなされているが [バルトリド 2011: 274]、アーリムがハーンの称号を帯びたという明確な記述は存在せず、史料によって彼の称号は異なる [Beisembiev 2008: 291]。本稿では便宜的に全時代を通じてこの王朝をコーカンド・ハーン国と呼び、君主の称号は『選史』に従う。

6) 一例を挙げると、ウズベキスタン科学アカデミー歴史学研究所が編集した『ウズベキスタン史』はイルダナ・ビー İrdāna Bī の二度目の統治期を 1753 年から 1762 年、アーリム・ハーン 'Ālim Khān の統治期を 1800/01 年から 1810 年とするが、近年コーカンド・ハーン国史をまとめたリヴァイは前者を 1753 年から 1769 年、後者を 1799 年から 1811 年とする [Istoriia Uzbekistana 2012: 376-377; Levi 2017: xix]。

I 著者ムハンマド・ハキーム・ハーン

1 出自

著者ムハンマド・ハキーム・ハーンについて、これまで『選史』以外の情報源は知られていなかった。ここでは、近年のタリーカ研究の成果に照らして著者の出身家系の系統を明らかにした上で、コーカンド・ハーン家との関係を再考する。

著者は自らについて、16世紀のナクシュバンディーヤの高名な指導者ホージャ・アフマド・カーサーニー＝マフドゥーミ・アアザム Khwāja Aḥmad Kāsānī Makhdūm-i A'zam (1542年没)の子孫、サイイド・マアスーム・ハーン Sayyid Ma'sūm Khān (1834年没)の息子と述べる [MT1: 1]。マフドゥーミ・アアザムの子孫たちは、その埋葬地であるサマルカンド近郊のダフバード Dahbid 村を拠点として教団活動を継続し、周辺諸国の歴代君主たちに対する宗教的指導力を有したほか [Kügelgen 1998]、カシュガルに進出して政権を担ったことはよく知られている。また預言者ムハンマドの子孫サイイドとしても中央アジアのムスリム社会において大きな影響力をもっていた⁷⁾。

著者はマフドゥーミ・アアザムから自身に繋がる系譜を挙げていないが、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 3404 写本の 1a 葉には、著者の一族がマフドゥーミ・アアザムの子ホージャ・イスハーク Khwāja Ishāq の子クトゥブ・アッディーン・ホージャ Qutb al-Dīn Khwāja の子孫であることを示す系図が記されている。スーフィズムに関する6点の作品を収めるこの写本の元来の所蔵者ユースス・ジャン・ダダ・ムハンマド・アグリク・オグル・ホーカンディー Yūnus Jān Dāda Muḥammad Āghāliq ūghli Khūqandī は、『選史』の一写本の所蔵者でもあったことから、著者一族の近親者であり、3404 写本の系図もその関係で書かれたと考えられる [KSH: 206-208; MT2: xviii-xx]。

また、『選史』には、一族の祖先がサマルカンドから到来したと述べられている。すなわち、著者の曾祖父アルトゥク・ホージャ Ārtūq Khwāja はサマルカンドに住んでいたが、ファルハード・アタリク Farhād Atāliq の起こした政変に巻き込まれて父が殺害されたため、当時コーカンド・ハーン国領であったフジャンドに逃れてきた [MT2: 8-10]⁸⁾。上述の系譜に挙がるホージャ・イスハークの廟は、サマルカンドのバーギ・バランド Bāgh-i baland 地区にあって息子のクトゥブ・アッディーン・ホージャが守っていたことがわかっており [澤田 1996: 40-44]、一族がサマルカンドから到来したとする『選史』と矛盾しない。著者の一族はサマルカンドを拠点としたホージャ・イスハークの後継者であると考えて大過ある

7) 特に「カシュガル・ホージャ家」のアーファーク・ホージャの子孫はフェルガナ盆地でも大きな影響力を持っており、例えばマルギランを拠点とした一族は広く民衆の帰依を得て、ロシア軍による侵攻の際には抵抗運動を主導するなどの統率力を発揮したことが知られる [河原 2019]。

8) ファルハード・アタリクは、1713～1722年頃に激しい民衆反乱が続いていたサマルカンドのハキームであった [Abdurrahman-i Tali': 67-68; Istoriia Samarkanda: 262-263]。

まい。

著者の一族は、コーカンドに到来後、ハーン家の姻戚となった（図1参照）。『選史』によると、両家の関係は以下のように極めて緊密であった。まず、アルトゥク・ホージャがフジヤンドに避難する少し前、コーカンドの君主ラヒーム・ハーン Raḥīm Khān（在位 1722 年頃～1734 年頃）がサマルカンド一帯に遠征した際に、シャフリサブズのケナガス

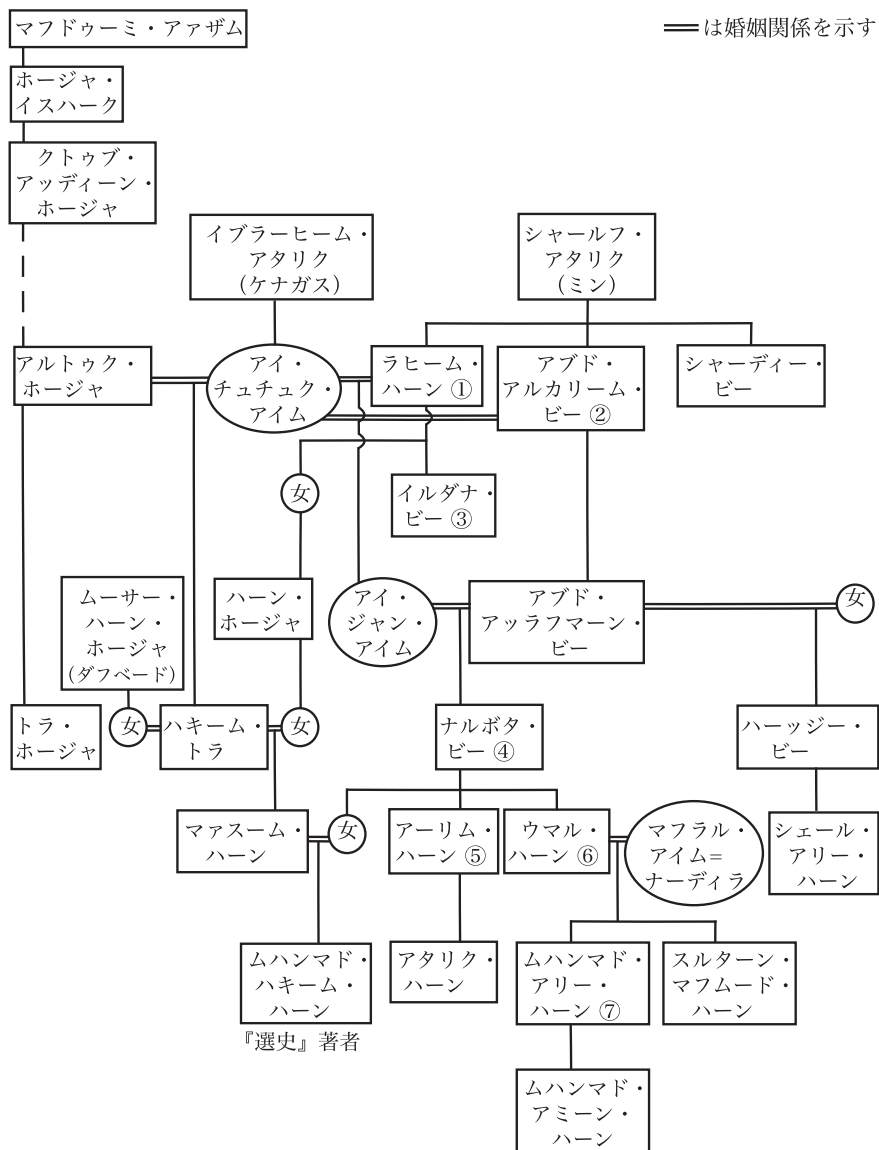


図1 コーカンド・ハーン家とムハンマド・ハキーム・ハーン一族関係系図
角囲みは男性，丸囲みは女性，人名の後の数字は『選史』にもとづく即位順
（『選史』およびウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 3404 写本をもとに作成）

Kinagas 部族から臣従の証として首領一族のイブラーヒーム・アタリク Ibrāhīm Atāliq の娘 アイ・チュチュク・アイム Āy Chūchūk Āyīm を娶り、娘のアイ・ジャン・アイム Āy Jān Āyīm が生まれた [MT2: 5]。ラヒーム・ハーンの死後、アイ・チュチュク・アイムはその弟で後継者であるアブド・アルカリーム・ビー ‘Abd al-Karīm Bī (在位 1734 年頃～1755 年頃) に嫁したが、その死後、次の君主イルダナ・ビー (在位 1758 年頃～1769 年頃) がアルトゥク・ホージャに嫁がせた。この婚姻によって著者の祖父ハキーム・トラ Ḥakīm Tūra (1806/07 年没) が誕生した [MT2: 6, 9-10]。イルダナ・ビーはまた、アイ・ジャン・アイムをアブド・アルカリーム・ビーの息子のアブド・アッラフマーン・ビー ‘Abd al-Raḥmān Bī に嫁がせ、後の君主ナルボタ・ビー Nārbūta Bī (在位 1769 年頃～1799 年頃) が生まれた [MT2: 8]。この関係を背景に、ハキーム・トラはナルボタ・ビーの即位後、相談役として仕え、ハキーム・トラの兄弟のトラ・ホージャ Tūra Khwāja は、大ホージャ khwāja-i kalān の職にあった [MT2: 128-129]。そして、ハキーム・トラとイルダナ・ビーの姉妹の息子ハーン・ホージャ Khān Khwāja の娘との間に生まれたのが、著者の父マアスーム・ハーン (1834 年没) である。なお、ハキーム・トラの別の妻はダフベードのマフドゥーミ・アァザム裔の中心人物ムーサー・ハーン・ホージャ Mūsā Khān Khwāja の娘であったといい、著者の家族はダフベードの一族とも関係を保持していた [MT2: 16, 33]⁹⁾。マアスーム・ハーンとナルボタ・ビーの娘でアーリム・ハーン (在位 1799 年頃～1809 年頃) およびウマル・ハーン ‘Umar Khān (在位 1809 年頃～1822 年) の同腹の姉妹との間に生まれたのが著者ムハンマド・ハキーム・ハーンである。マアスーム・ハーンは、ウマル・ハーンの統治期にハーン国の宗教的役職では最高位のシャイフ・アルイスラーム shaykh al-islām の地位にあり、アーリム・ハーンの統治期から国政全般に助言をしていたという [MT2: 137, 284]。この経緯をナクシュバンディーヤの発展史の観点から見ると、一族はサマルカンドを追われたものの、コーカンド・ハーン家と関係を築いて高い地位を獲得することにより、むしろ新天地に勢力を伸張させることに成功したのである。

このように著者は、父方ではナクシュバンディーヤの後継者、サイイドの生まれにして、母方では代々の幾重もの婚姻によるハーン家の子孫であった。また、一族は政権の中核部で要職に就く有力者であり、著者はコーカンド・ハーン国の歴史的出来事に直接的に関わる立場にあった。

2 経歴

著者の経歴に関しては『選史』がほぼ唯一の情報源であり、すでに大概が示されてきた。しかし、先行諸研究には年代や事柄について誤りや相異なる解釈があるため、ここで改めて

9) ムーサー・ハーン・ホージャはインドから中央アジアにナクシュバンディーヤの改革派ムジャッディディーヤの教義をもたらし、さらにそれはコーカンド・ハーン国領にも伝播したことが知られている [Babadžanov 1996; Kawahara 2015]。

『選史』に基づいて先行研究との見解の相違点を確認しつつ整理する。『選史』執筆までのムハンマド・ハキーム・ハーンの経歴は、コーカンドの宮廷で過ごした「コーカンド時代」、追放されて出かけた「マッカ巡礼旅行時代」、巡礼からの帰還後にブハラとシャフリサブズで過ごした「亡命時代」の3つに大別される。

彼は、アーリム・ハーンの治世の1221年サウル Thawr 月（イラン太陽暦第2月）15日（1806年5月5日）頃にコーカンドで誕生した [MT2: 69-71]¹⁰。彼は、ウマル・ハーンの息子で、自身の従弟にあたるムハンマド・アリー・ハーンとともに成長した [MT2: 264]。ウマル・ハーンの後宮に立ち入ることを特別に許可されており [MT2: 146-147, 181-182, 194, 218]、母親のように慕っていたウマル・ハーンの妻、マフラル・アイム Māhlār Āyim のもとを日に何度も訪ねる生活を送っていた [MT2: 261-262]。最盛期を迎えた当時のコーカンド・ハーン国では、ウマル・ハーンが文芸活動を好んで保護したため、チャガタイ語やペルシア語による文学の復興が見られた。宮廷ではティムール朝のヘラートのそれを模して各地の詩人を集めた文学サロンが催され、ウマル・ハーンはアミール Amīr の雅号で、また妻のマフラル・アイムはナーディラ Nādira の雅号でこれに加わっていた [Eckmann 1964: 130-133]。著者は受けた教育については述べていないが、このような恵まれた環境に育ち、イスラーム諸学の伝統的な教育を受けたのは間違いない。

1230（1814/15）年、ウマル・ハーンがカザフ草原の町トルキスタンの征服を記念して

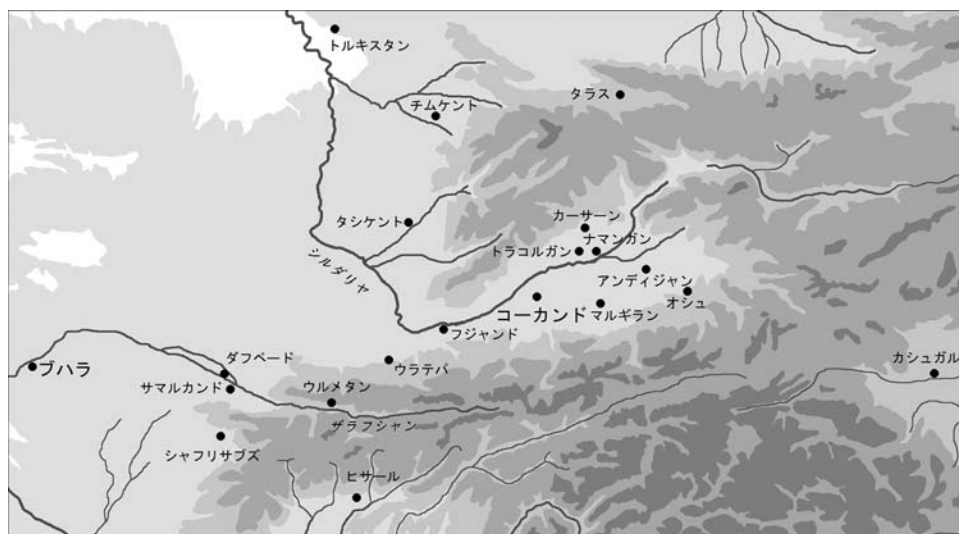


図2 『選史』完成前後のフェルガナ盆地周辺（MT2の付録地図をもとに作成）

10) 著者の生年は、アーリム・ハーンが殺された時、7歳だったという別の箇所の記述から計算して1217（1802/03）年であるとも考えられてきたが [MT2: 114; MT-D1: 24]、本稿では著者自身の記述に従って1221年とみなす。

「アミール・アルムスリミン Amir al-muslimin (ムスリムの長)」の称号を宣言した際に大々的に行った官職の叙任式では、若年にもかかわらずナキーブ naqib 職に任命された [MT2: 137]。一般にその職掌は、サイドの血統を認定することであったが [Havemann 1993: 926], 『選史』には具体的な職務については述べられていない。ウマル・ハーンが死亡するまでの6年間、片時も傍を離れずに仕え [MT2: 223], 若くして政権内に地位を築いていた。1237年ラビー・アッサーニー月(1822年1月)にウマル・ハーンが死亡し、息子のムハンマド・アリー・ハーンが即位すると、ナマンガン、トラ・コルガン、カーサーンのハーキムに任命された [MT1: 229; MT2: 283-284]。しかし、程なく職を解かれて拘束された後、マッカ巡礼の許可を名目に国を追放された [MT2: 289-298]。著者の父もその直前に同じように追放されていた。したがって、彼がコーカンドで過ごしたのは1822年頃、16歳頃までであった。

彼はコーカンドからタシケントに行き、そこから隊商に合流してマッカ巡礼に出発した。カザフ草原を北東に進み、途中のチュー川までムハンマド・アリー・ハーンの臣下とタシケントの護衛兵が随行した [MT2: 302-306]。セメイ、オムスク、イルビット、トロイツクを経由し¹¹⁾、1824年の秋にはオレンブルグにおり、そこで東方視察中だった皇帝アレクサンドル一世に面会した [MT1: 73; MT2: 337-376; Beisembiev 2009: 106]。その後、アストラハンに到着したが、8ヶ月間病床に伏せった [MT1: 277; MT2: 377-385]。そこからコーカサスを横断し、黒海を渡り、アナトリアを縦断してダマスクスに到着した¹²⁾。1242(1826/27)年、カイロに滞在後、航路マッカ巡礼を果たした後、再びカイロに戻り、書道の勉強に励んだほかオスマン帝国のエジプト総督ムハンマド・アリー・パシャと交流を持った [MT1: 5; MT2: 420-492]。同年、帰路につき、ダマスクスに5ヶ月 [MT2: 492-501], 1243(1827/28)年バグダードに3ヶ月滞在後 [MT1: 71, 331; MT2: 507-508], クルディスタンに入った。1244(1828/29)年、イランに到達し、カージャール朝のファトフ・アリー・シャーに面会した [MT1: 255; MT2: 508-546]。同年、マシュハド、サラフスを経由して中央アジアに帰還し、アミール・ナスル・アッラー Amīr Naṣr Allāh (在位 1826~1860年)の統治するブハラに到着した [MT2: 546-566]。彼の旅は、1822年頃から1828年頃までの約7年間に及び、彼が17~23歳にかけてのことであった。

11) ラスールおよびカーディロヴァは、旅行記の解題において、著者がイルクーツクとサラトフも経由したと述べるが、誤りである [Hakimxon 1966: 12]。

12) フルシュトは、著者がイランに向かったもののマーザンダラーンから先に進めなかったと述べ、地図においても、カスピ海を航路縦断して現在のイランのマーザンダラーン州に至ったと示すが [Khurshut 1987: 4, 25], 『選史』によると、アストラハンを出発後、イスタンブルを目指して10日でマーザンダラーンの森林地帯に到着したが、そこからは進めなかったため右に進路を変更してクバン川に到着したとあるため、陸路コーカサスで進路変更をしたのが正しい [MT2: 386]。また、ラスールおよびカーディロヴァは、黒海を渡ってイスタンブルに行ったと述べるが [Hakimxon 1966: 13], 『選史』によると、イスタンブルに行くのは諦め、黒海を渡るとスノブから上陸してアダナに向かってアナトリアを縦断したので [MT2: 410-416], これも誤りである。

その後、彼は亡命生活を送る。しばらくブハラのマドラサに寄宿して学問に励むが¹³⁾、1251 (1835/36) 年に、シャフリサブズに移住した [MT1: 477]。シャフリサブズはケナガス部族が支配し、ブハラのマンガト部族とコーカンドのミン部族の間で半ば独立を保っていた。彼は少なくとも 15 年間、38 歳頃まで亡命生活を送り、1843 年に『選史』を完成させた。『選史』には彼自身の妻子に関する記述はないが、後にバルトリドが著者の孫について言及していることから、彼には家庭があったらしい [Bartol'd 1973: 157]。

このように著者は、高い教養を持ち向学心に富む人物であったと言える。マッカ巡礼旅行中に各地の統治者が彼と面会して厚遇したのは、著者の経歴ゆえの情報収集が目的だったのであろう。

II 『選史』の内容

1 書名と構成

本書の書名は作品の冒頭で「この編纂された選集を『選史』と名付けた Īn majmū'a-yi mu'allaf-rā *Muntakhab al-tawārikh* nām nahād」と明記されている¹⁴⁾。そして以下のような構成をとっている。なお、章と節の題名は完訳ではなく、本稿筆者が簡略化したものであり、また括弧内は筆者による補足である。

神と預言者への賛辞と短い序文

1 章：アダムからムハンマドまでの預言者たちの歴史

2 章：ペルシアの諸王

第 1 節 ピーシュダード朝

第 2 節 カヤーン朝

第 3 節 アシュカーン朝

第 4 節 サーサーン朝

3 章：中国 *Khitay* とヨーロッパ *Farang* の諸王

4 章：カリフたちの歴史

第 1 節 正統四カリフ

第 2 節 ウマイヤ朝

第 3 節 アッバース朝

13) ベイセンビエフは、著者がマドラサで教師をしていたと解釈しているが [Beisembiev 2009: 107]、『選史』では、マドラサで「勉学に勤しんだ *ba khwāndan mashghūl gashtam*」と述べられている [MT1: 434]。

14) チャガタイ語のタシケント 1560 写本は、同じ意味ながら *Intikhāb al-tawārikh* の書名を持つ [SVR-1: 89; SVR-i: 198]。

5 章：アッパース朝以後現在までのスルターンたち

- 第1節 サッフアール朝
- 第2節 サーマーン朝
- 第3節 ダイラム朝
- 第4節 ガズナ朝
- 第5節 セルジューク朝
- 第6節 ホラズムシャー朝
- 第7節 チングス朝
- 第8節 ティムール朝
- 第8節 バーブル朝（ムガル朝）¹⁵⁾
- 第9節 シャイバーン朝
- 第10節 アシュタルハン朝
- 第11節 マンギト朝（ブハラ・アミール国）
- 第12節 ミン朝（コーカンド・ハーン国）

このように『選史』は、アダムに始まる預言者の時代から同時代までのイスラーム王朝を扱う普遍史である。同時代史は、ブハラ・アミール国史とコーカンド・ハーン国史が並行して書かれており、コーカンド・ハーン国史に著者のマッカ巡礼旅行記が組み込まれている。『選史』は写本によっては700葉近い大部の作品であるが、分量の面から見ると、前代までの歴史 [MT1: 1-352]、ブハラ・アミール国史 [MT1: 353-612]、コーカンド・ハーン国史 [MT2: 1-297]、マッカ巡礼旅行記 [MT2: 297-660]¹⁶⁾ が、それぞれ全体のおよそ四分の一ずつを占める。

2 情報源

『選史』は、前代までの部分は先行史書からの引用であり、書名が示す通り複数の史書が利用されている。しかし、著者は用いた史書を列挙しておらず、書名を挙げる場合でも引用範囲を示していないため、先行研究においても前代までの部分がどのように編纂されたのかは全く明らかにされてこなかった。例えばムフタロフは、『タバリーの歴史 *Tārīkh-i*

15) ムガル朝史は、ティムール朝史の後で再び第8節として続けて書かれている。どの写本においてもこの節番号に修正が加えられていないことから、誤りではなく意図的に同じ節番号を付したと思われる。

16) マッカ巡礼旅行の記述が始まった後もコーカンドの情勢について書いているため、両者を厳密に分けることはできないが、本稿では著者がマッカ巡礼に出発した記述から作品の最後までをマッカ巡礼旅行記とみなした。またペテルブルグ C470 写本には、他の写本に見られない 1845 年までの出来事が末尾に追記されているが、本稿では検討の対象としない [MT2: 661-686; MT-S: 679a-697b]。

Ṭabari』、ミールホンド Muḥammad ibn Khāwand Shāh ibn Maḥmūd の『清浄の園 *Rawḍat al-ṣafā*』などの歴史書が利用されたと述べているが、具体的な根拠は示されていない [MT-D1: 16]。フルシュトは、ブハラ・アミール国史とコーカンド・ハーン国史の部分の情報源を検討し、前者にムハンマド・ワファー・ケルミナギー Muḥammad Wafā Karminagī 著『ハーンの贈り物 *Tuḥfat al-khānī*』やムハンマド・シャリーフ Muḥammad Sharīf 著『歴史の王冠 *Tāj al-tawārikh*』などが利用された可能性を指摘しているが、やはり根拠は挙げられていない [Khurshut 1986b: 40]。また、同時代史の部分では目撃談のみならず、年長者からの伝承にも依拠している。本節では、著者が利用した史料と口承の情報提供者について『選史』の記述を手がかりに検討する。

(i) 先行史書からの引用

- (1) ムハンマド・イブン・マフムード・アムリー Muḥammad ibn Maḥmūd Āmulī 著『高貴なる諸学問 *Nafā'is al-funūn fī 'arāyis al-'uyūn*』¹⁷⁾

ファールス地方を支配したインジュ朝君主アブー・イスハーク（在位 1343～53 年）に献呈されたペルシア語の百科事典（1343～53 年完成）である。第 4 部 *maqāla* の第 2 と第 3 の学問 *fan* が、「5 章から成る歴史と伝記の学 *ilm-i tawārikh wa siyar mushtamil bar panj bāb*」と題された簡潔な普遍史である [大塚 2017: 271, 278-279]。著者は『高貴なる諸学問』を用いたことに二度言及している [MT1: 72, 92]。そして実際に、『高貴なる諸学問』の歴史は第 5 章第 7 節のホラズムシャー朝で終わるが、『選史』の第 5 章 7 節まで、章 *bāb* や節の構成も、第 2 章の節分けでは *faṣl*、第 4 章および第 5 章の節分けでは *ṭā'ifa* の語を用いる点も、『高貴なる諸学問』に全面的に依拠している [MT1: 1-150; NF: 170-263]。

しかし、この箇所にも部分的に著者が見聞した話の加筆や他の史料を用いた編集が見られる。特に、第 5 章第 6 節の後半 [MT1: 130-140] にはケルマーンのカラキタイ朝やムザッファル朝の話が、第 7 節の後半 [MT1: 150-161] にはイルハン朝末期の話やチョパン朝、ジャライル朝、サルバダール朝の話が挿入されているが、用いた史料名は示されていない。ここに利用された史料に特徴的なのは、『高貴なる諸学問』からの書き写し部分では年号が同書に倣ってアラビア語の単語で書かれるのに対し、この二つの部分では、ペルシア語の単語で表されていることである。ただし、両部分で用いられたのが別々の史料である可能性もある。

第 5 章第 8 節のティムール朝とムガル朝 [MT1: 161-173 他] で用いられた史料名は挙げ

17) 本稿の検討ではイランで出版された校訂本 [NF] を用いた。同書の写本は、中央アジアではウズベキスタンに 1 写本とタジキスタンに 1 写本が現存するのみであり、[SVR-3: 414; KVR: 72-73]、広く流通していたとは考えにくいことから、著者は旅行中に写本を入手した可能性がある。なお、著者は『高貴なる諸学問』において「現在 *aknūn*」と書かれている箇所を、理由は不明ながら「773 (1371/72) 年」と書き換えている [MT1: 72]。

られていない。ティムール朝部分ではスルターン・フサイン・ミールザーの話題が大部分を占め、ムガル朝部分ではパーブルがインドを征服するまでを扱う。この部分では、年号を示す際にアラビア数字、ペルシア語の単語、アラビア語の単語が代わる代わる用いられている。また項目名においても、他の部分と同様の「記述 dhikr」のほか、「小話 qışsa」、「話の説明 guftār dar bayān」が代わる代わる用いられており、少なくとも3種類の史料を用いたと考えられる。なお、著者はティムール朝期の著名な歴史書、ミールホンドの『清浄の園』に言及するが、『高貴なる諸学問』に依拠する部分で異説の紹介として挙げるほか、詩を引用するばかりであり [MT1: 3, 79, 87, 115, 117, 124, 230]、第8節とは項目の構成も一致しない¹⁸⁾。仮に同書に依拠したとすれば、他の箇所には見られないかなりの編集作業を行ったことになる。

- (2) ムッラー・シャラフ・アッディーン・アアラム・イブン・ヌール・アッディーン Mullā Sharaf al-Dīn A'lam ibn Nūr al-Dīn 著『ラーキム史 *Ta'riḥ-i Rāqimī*/*Ta'riḥ-i Sayyid Rāqim*』

ティムール朝、シャイバーン朝、アシュタルハン朝を扱う 1054 (1644/45) 年前後に完成したペルシア語の歴史書である。著者は同書の書名を挙げていないが¹⁹⁾、ドシャンベ写本の欄外に「『ラーキム史 *Ta'riḥ-i Rāqimī*』によると」と書き込みがあり¹⁹⁾、実際にこの箇所より後の第5章第8節の一部 [MT1: 174-176, 200-202, 242-245, 247; TR: 56-57, 59-68, 111-112, 121, 125] と第5章第9節の大部分 [MT1: 287-288, 292-305; TR: 99, 104, 113, 118-119, 123-124, 127, 130-131, 144, 150-151, 153, 170-173] の内容が一致する²⁰⁾。

- (3) ムハンマド・ユースフ・ムンシー・イブン・ホージャ・バカー Muḥammad Yūsuf munshi ibn Khwāja Baqā 著『ムキーム・ハーン史 *Ta'riḥ-i Muqīm khānī* / *Muqīm-nāma* / *Tadhkira-i Muqīm khānī*』

アシュタルハン朝期のバルフの支配者ムキーム・ハーン (在位 1702~1707 年) の命によって 1704 年に書かれたシャイバーン朝期末からアシュタルハン朝期に関するペルシア語の歴史書である。著者も書名を挙げており [MT1: 289, 315]、第5章第9節の一部 [MT1: 276-277; TM: 79-86] と第5章第10節の大部分 [MT1: 306-315, 322-335; TM: 119-124,

18) 本稿ではイランで出版された校訂本 [RS] を参照した。

19) その箇所では 1889-98 年に完成したオスマン語による『世界歴史地理大事典 *Qāmūs al-a'lām*』の内容と対比され、ユヌス Yūnus と署名があることから、後代の書き込みであることは確実である [MT1: 173]。

20) 本稿での比較においてはイランで出版された校訂本 [TR] を用いた。一部の写本カタログでは本史料の著者をアミール・サイイド・シャリーフ・ラーキム・サマルカンディーとされているが、正しくはムッラー・シャラフ・アッディーン・アアラムである。[SVR-i: 164-165; 河原 2008: 12-13]。

131-136, 155-163, 167-172, 179-184, 194-200, 211-214, 245, 273] の内容が一致する²¹⁾。

(ii) 同時代史における情報源

同時代史であるブハラ・アミール国史とコーカンド・ハーン国史の部分に史料が引用された形跡はなく、著者自身による叙述である。ただし、著者の幼年時代の最初の記憶は、コーカンド・ハーン国史において、1226 (1810/11) 年、アーリム・ハーンが廃位された際、7歳の著者に別れを告げた話である²²⁾。また、ブハラ・アミール国史の部分で著者自身が目撃したのは、1244 (1828/29) 年の亡命以降の事件である。しかし、著者は日記のような詳細な記録はつけていなかったようである。自身の目撃談を書いた部分でも、同じ事件について別の箇所では違う年号を挙げたり、あるいは同じ人物について別の箇所では異なる称号をつけるなどの不明瞭が見られるからである²³⁾。

上述したように、著者の一族は日頃から君主の側近くで仕えており、コーカンド・ハーン国の政治に深く関わっていた²⁴⁾。『選史』ではこのような一族が関わる出来事の記述が詳細であり、著者は父から情報を伝え聞いたと考えられる。ブハラ・アミール国史も王朝の発展を述べたものではなく、著者の祖先のほか親交のあったシャフリサブズ、ウラテパ、ヒサルなどの町の支配者たちからの口承の情報に拠っており、これらの半独立政権とブハラ・アミール国とコーカンド・ハーン国との関係についての話題が多い²⁵⁾。

したがって、著者は、冒頭から第5章第7節までをその章立ても含めて『高貴なる諸学問』に依拠し、以後の時代はその章立てを引き継ぐ形で他の史料を引用して編纂した。第9節では『ラーキム史』を、第10節では『ムキーム・ハーン史』を主に用い、伝統的なベル

21) 本稿での比較においてはイランで出版された校訂本 [TM] を用いた。

22) ただし、ここでの年号はその後のウマル・ハーンの即位の箇所における「ウマルが正義に座った 'Umar ba-'adl nishast」という語句からのアブジャド計算で導き出したものである [MT2: 114, 127]。

23) 例えば、ムハンマド・アリー・ハーンが弟のスルターン・マフムード・ハーン *Sulṭān Maḥmūd Khān* を追放した年をある箇所では1245年 [MT2: 574]、別の箇所では1246年 [MT1: 451] としている。また、ウラテパの支配者について、バーバー・パルヴァーナチ *Bābā Parwānachi* [MT1: 371-373; MT2: 65]、バーバー・ディーヴァーンベギ *Bābā Dīwānbegī* [MT1: 389-390; MT2: 36-37] の両方の称号が見られる。

24) 例えば、ハキーム・トラは、ナルボタ・ビーとブハラのシャー・ムラード (在位 1785~1800 年) との戦争の際に和解の使者として赴いた [MT1: 384-385; MT2: 37]。トラ・ホージャがウマル・ハーンからアミール・ハイダルへの使者となったこともあった [MT2: 128]。シャー・ムラードの息子アミール・フサイン *Amir Ḥusayn* が兄弟のアミール・ハイダル *Amir Ḥaydar* (在位 1800~1826 年) と対立し、コーカンドに亡命した際にはマアスーム・ハーンが保護した [MT2: 139-140]。

25) 例えば、ウラテパのかつての支配者の弟で、コーカンドの大ホージャ、ブハラのシャイフ・アルイスラームを務めたスルターン・ハーン・ホージャ *Sulṭān Khān Khwāja* (1834 年没) のことは「私の父 *qibla-gāham*」と呼び慕い、多くの情報を得ている [MT1: 370, 412-413, 425; MT2: 83-84]。

シア語の普遍史の様式で執筆した。著者が執筆時に住んでいたシャフリサブズにはこれらの史料は揃っていたが、作品の四分の三を占める第11節と第12節のオリジナル部分は伝聞であれ目撃談であれ主に記憶に頼って執筆したと思われる。

3 序文

『選史』編纂の目的が最終節のコーカンド・ハーン国史の執筆であることは明白である。では、著者は執筆の目的をどう述べているだろうか。『選史』の冒頭の無題の短い序文にあたる部分には次のように書かれている。

「両世界の主、その預言者ムハンマド、その一門、その全ての教友たちに感謝と祝福あれ。さて、この無名にして人知らぬ庵の卑しき者、辛苦と失望の沙漠の放浪者、ハーッジー・ムハンマド・ハキーム・ハーン・イブン・サイイド・マアスーム・ハーン・マフドゥーム・アアザミーは、たどたどしい言葉で、アードムの時代から最後の預言者まで、そして、最後の預言者から現在まで、歴史書に述べられた出来事を選び、聞き手を退屈させないようにしたいと思い立った。このため、非力で資金不足であるにも関わらず、簡潔簡略に書き始めたのである。(詩、中略)そして、この編纂書を『選史』と名付けた。その目的は、助言 pand, 忠告 naṣīhat, 信頼 i'tibār であり、物語や情報の報告ではない。炯眼なる人々は、多くの偉大なる人々や、数多の指導者たちが残したこの華麗さ、財産、富、幸運をあてにしたり、愛しい人や恩恵を失うことや、忌まわしいことや悲しいことが起こることを悲しんだりすべきではない。何日かの猶予を無駄にせず、手放すことなく、それを、永久の不滅の源、永遠の幸運の手段と知るべきである。そして、神の思し召しがあれば、この選書を五つの章 bāb と12の節 ṭāyifa で述べよう。」[MT1:1]

下線を引いたのは『高貴なる諸学問』の校訂本と同文の部分である[NF:170]。すなわち、歴史学の必要性についてもほぼ原文通りに引用しているのであり、著者が自分の言葉で執筆について述べているのは、前半の「歴史書に述べられた出来事を選び、聞き手を退屈させないようにしたいと思い立った」という言葉のみなのである。また、「資金不足」という言葉からは執筆の依頼者がおらず、自らの意思で編纂したことが窺える。しかし著者は、主要部分であるコーカンド・ハーン国史をどのように描こうと構想したのかについては述べていない。それゆえ、内容から検討する必要があるのである。

Ⅲ 『選史』執筆の目的

1 執筆時期

作品をいつ書き始めたのかは、その作品を何のために書くのかという動機と直結する重要な問題であるにもかかわらず、『選史』にはその点について何も述べられていないため、これまで検討されたことがなかった。そこで本節では、『選史』の本文中の記述から執筆時期

を分析する。

まず、著者が「現在」と述べている箇所に着目する。第5章第8節ムガル朝史のヨーロッパ人によるインド征服の話題の箇所で、「1258年現在 *hālā ki sana-yi 1258 ast* においても彼らにはこのような習慣がある」と述べられている [MT1: 275]。第9節シャイバーン朝史においても、「当時のマー・ワラー・アンナフルの町々は、1258年現在 *sana-yi 1258 al-hāl* のコーカンドと同様であった」とある [MT1: 286]。

一方、『選史』が1259年ラビー・アルアッフル月（1843年4月1日～30日）に完成したことはほぼ確実である。『選史』の中の最新の記事は、第11節と第12節のそれぞれ1259年ラビー・アルアッフル月朔日（1843年4月1日）の出来事であり、『選史』の現存する写本のうち最も古いタシケント592写本が、そのわずか1ヶ月後の1259年ラビー・アッサーニー月5日（1843年5月5日）に筆写を完了しているからである [MT2: 659]。当該写本には「初めに作られた10点の写本のうちの一つ」とのメモがあるため、完成と同時に写本が作成されていたことも知られている [MT-T592: 1b]。

しかし、第11節の上述の日付のバーラクザイー朝のドースト・ムハンマド・ハーン *Dūst Muḥammad Khān* からアフガニスタン征服の報が届いたという記事は、初期の3写本のうちサンクトペテルブルグC470写本とタシケント592写本においては、記事全体が本文ではなく欄外の空白部分に加筆されている [MT1: 514]。また、チャガタイ語訳写本の一つタシケント594写本にはこの記事自体が存在しない [MT-T594: 208a]。他方で、第12節の同じ日付のアーリム・ハーンの息子のアタリク・ハーン *Atāliq Khān* が殺されたという記事は初期の3写本全てにおいて本文中に書かれている [MT2: 659]。

これらのことから、著者は1258年に先行史書を編纂する作業を進めていたことがわかる。そして1259年ラビー・アルアッフル月に脱稿する段階で、すでに第11節までの複数の写本の作成は済んでおり²⁶⁾、それらに最新の記事を加筆する作業を同時に行っていたと考えられる。チャガタイ語写本の一つにその記事がないのは、加筆し損なったペルシア語写本が存在していたためであろう。作品の分量から見ると、著者はかなり速筆だったようである。

2 執筆時の状況

『選史』の執筆時、著者はどのような境遇にあったのだろうか。著者は1244（1828/29）年に旅から戻りブハラ・アミール国に入った。アミール・ナスル・アッラーと面会するが、その背景にはコーカンドから亡命してブハラのシャイフ・アルイスラームに取り立てられていたイーシャー・スルターン・ハーンの取りなしがあった。アミールは著者にたびたび宮

26) 初期の3写本全てにおいて第5章第12節は葉を改めて書かれている。このほか、第11節までの前半と第12節からの後半の二冊に分けて綴じられた写本（タシケント595写本と596/I写本）も存在することから [MT2: xviii-xx, 1], 『選史』は筆写の際に半分ずつ取り扱われていたと考えられる。

仕えを要望するが、著者は断り続けた [MT1: 434, 456, 459, 464-466, 477]。その理由として、「宮廷で仕えることは危険だった」 [MT1: 467] と述べているが、これがコーカンドでの失寵と追放を踏まえているのは明らかであろう。なお、1247 (1831/32) 年頃には著者の父がアミール・ナスル・アッラーの庇護下であり、毎月 1000 タンガの年金を受け取っていたが [MT1: 457]、著者が同様の援助を受けていたかについては述べられていない。アミールが著者を軍事遠征に同伴したことが書かれているので [MT1: 472]、何らかの保護を受けていたようである。

著者は 1251 (1835/36) 年、マッカ巡礼の許可を得る名目でブハラを後にし、巡礼には行かずシャフリサブズに行き、支配者ダーニヤール・アタリク Dāniyār Atāliq の庇護下に暮らすようになった [MT1: 477]。その少し前、1245 か 1246 (1829~31) 年に²⁷⁾、ムハンマド・アリー・ハーンが弟のスルターン・マフムード・ハーンを国外追放し、後者もアミール・ナスル・アッラーの保護のもとでシャフリサブズに亡命していたことも移住の理由となった [MT1: 451; MT2: 574]。

1254 (1838/39) 年、コーカンドにおいてムハンマド・アリー・ハーンに対する人々の不満が高まっているという知らせが入った。それはハーンが自身の生母ではないウマル・ハーンの寡婦と結婚したことに関連していたが、著者はこれをイスラーム法に反すると非難し²⁸⁾、スルターン・マフムード・ハーンとともにアミール・ナスル・アッラーに解決への援助を求めた [MT1: 524-528; MT2: 594-603]。1255 (1839) 年、アミール・ナスル・アッラーは、コーカンドの混乱に乗じてスルターン・マフムード・ハーンをブハラ領のコーカンド方面の最前線の一つザラフシャン渓谷のウルメタンのハーキムに任命し [MT1: 530-532; MT2: 607]、さらにコーカンドから奪い取ったフジャンドを与え [MT1: 541-542]、コーカンドに迫った。しかし、これを危惧したムハンマド・アリー・ハーンは、1256 年ズールカアダ月 (1840 年 12 月 25 日~1841 年 1 月 23 日)、スルターン・マフムード・ハーンに兄弟での共同統治を提案し、タシケントの支配権を与えた [MT1: 543; MT2: 620-621]。著者は、兄の誘いに乗ったスルターン・マフムード・ハーンに「軍人たちと民衆はあなた (の即位) を望んでいます。これが私の助言です。それなのに、コーカンドを放ってタシケントに行くなど何の意味があるのですか」と書き送ったが、無駄だった [MT2: 619-620]。この裏切りに立

27) 註 23 参照。

28) 例えば、初期の 3 写本のいずれにおいてもムハンマド・アリー・ハーンの名前を書くたびに「母・妻 mādar-zan」という蔑称をつけている。文字通り「母を妻にした」という意味の侮蔑である。この言葉は後に消されて「聖戦士 ghāzi」や「雌の māda」に書き換えられている [MT2: xii]。なお、このウマル・ハーンの寡婦は、ウラテバ征服によりコーカンドに連行されたサイイド家の娘であった。著者の父はシャイフ・アルイスラームの立場から、ウマル・ハーンとこの娘との結婚の際に、サイイドではないハーンとサイイド女性との結婚は許されないと反対し、著者の母がこの娘を養女にするという段階を経て結婚が決行されたという経緯があった [MT2: 188-196, 220-229]。

腹したアミール・ナスル・アッラーはコーカンドへの本格的な攻撃を開始し、1258 年ラビー・アッサーニー月 5 日 (1842 年 5 月 16 日)、コーカンドに侵攻し、ムハンマド・アリー・ハーン、スルターン・マフムード・ハーン、ムハンマド・アリー・ハーンの子ムハンマド・アミン・ハーン Muḥammad Amīn Khān、マフラル・アイムを殺し、コーカンド・ハーン国を併合した。アミール・ナスル・アッラーはコーカンドに代理を残し、多くの人質をブハラに連行した [MT1: 563-572; MT2: 634-643]。

シャフリサブズにいた著者たちが、アミール・ナスル・アッラーの容赦ない仕打ちに恐れをなしていると、アミール・ナスル・アッラーから著者に度々手紙が届いた。著者は「私も彼の望みが何であるかは知っていたから旅に出ようとした。しかし、彼から逃れる術はなかった」と述べているが、ここに言うアミール・ナスル・アッラーの望みとは、著者をコーカンドに据えて支配下に置くことである。旅とはそれを辞するためのマッカ巡礼を意味する。著者は窮地に追い込まれた [MT1: 575-576]。

しかし、コーカンドの征服から 2 ヶ月経った頃、ナルボタ・ビーの異母弟ハーჯー・ビー Hāji Bi の子で、45 年間クルグズ部族のもとで亡命生活を送っていたシェール・アリー・ハーン Shīr ‘Alī Khān (在位 1842~1845 年) が突如現れてコーカンドを奪還し、即位を宣言した。これについて著者は、「皆が喜んだ。特にケナガス部族の人々と私たちは大喜びした」と述べている [MT1: 574-575; MT2: 643-656]。

『選史』は、著者が緩衝地帯であるシャフリサブズの立ち位置を利用してムハンマド・アリー・ハーンの廃位とスルターン・マフムード・ハーンの擁立を画策するも失敗し、政治的激動のさなか、先の望みが断たれる危機感の中で執筆されたと言える。著者は当初この事件に積極的に関わっていたが、アミール・ナスル・アッラーの戦略はそれを凌駕していた。著者にとって望ましくない状況に陥るなか、シェール・アリー・ハーンが現れたのである。

3 著者のコーカンド・ハーン国史観

さて、著者はミン朝、すなわちコーカンド・ハーン国をどう捉えているのだろうか。『選史』には他のコーカンド・ハーン国の歴史書の存在について言及がない²⁹⁾。このことと、コーカンド・ハーン国に関する記述が口承情報と目撃談から構成されることを考え合わせると、著者は、それまで誰も書かなかったコーカンドの王朝史をまとめようと構想したはずである。

著者はコーカンド・ハーン国史の始まりに関して以下のように説明している。まず、第 5

29) 『選史』以前に書かれた現存するコーカンドの歴史書は、ウマル・ハーンを称えたアブド・アルカリーム・ナマンガニー・ファズリー ‘Abd al-Karīm Namangānī Faḍlī 著『ウマルの書 ‘Umar-nāma』およびミールザー・カランダル・ムシュリフ・イスファラギー Mirzā Qalandar Mushrif Isfaragī 著『ウマル・ハーンの王書 Shāhnāma-i ‘Umar-khānī』の 2 点のみである [Beisembiev 2009: 104-105]。

章第 10 節のアシュタルハン朝史の末尾において、次のように述べる。

「私はここで、アシュタルハン朝の後で（支配権が）至った二つの家系の統治と系譜を説明しよう。一つ目はブハラを支配しているマンガト部族であり、二つ目は現在コーカンドを支配しているミン部族である。Awwal Manqīt ki dar Bukhārā salṭanat mikunad. Duyyum Mīng dar Khūqand al-ḥāl salṭanat mikunad. ユズ、ケナガスなどの国もこの二つの国の合間に要約して説明しよう。神の思し召しがあらば。」[MT1: 352]

そして、第 11 節のブハラ・アミール国、第 12 節のコーカンド・ハーン国に枝分かれして同時代史となる。それぞれの書き出しは次の通りである。

第 11 節「マンガト朝は現在まで 7 人である。彼らの（統治）期間は 93 年になっている。Manqitiya tā bi-l-waqt haft tan-and. Muddat-i īshān nawad wa si sāl shuda-ast.」[MT1: 353]

第 12 節「ミン朝は 7 人だった。フェルガナ国における彼らの統治は 100 年だった。Mīngiya haft tan būdand. Muddat-i salṭanat-i īshān dar mamālik-i Farghāna šad sāl būd.」[MT2: 1]

すなわち、マンガト朝の冒頭は、アシュタルハン朝史末尾の予告通り現在形で書かれているのに対し、ミン朝の冒頭は君主の人数も統治期間も過去形で、第 10 節までの過去の王朝と同様に書かれているのである³⁰⁾。無論、それが意味するのはムハンマド・アリー・ハーンの死による王朝の断絶である。彼はすでに滅亡したコーカンド・ハーン国史を書いたのである。

君主の数は 7 名、統治期間は 100 年とされている。『選史』によると 7 人とその統治期間は、ラヒーム・ハーン（10 年）、アブド・アルカリーム・ハーン（8 年）、イルダナ・ビー（10 年）、ナルボタ・ビー（30 年）、アーリム・ハーン（12 年）、ウマル・ハーン（1226 年から 1237 年まで）、ムハンマド・アリー・ハーン（1237 年から 1258 年まで）であり、この 7 人の統治期間を合計すると 102 年になる [MT2: 5, 8, 17, 49, 125, 271, 639]。ここにはシェール・アリー・ハーンは含まれていない。

なお『選史』は初代の君主について「初めの人シャールフ・アタリク Shahrukh Atāliq の息子のラヒーム・ハーンであった。（中略）シャールフ・アタリクには 3 人の息子がいた。ラヒーム・ハーンとアブド・アルカリーム・ビーとシャードイー・ビー Shādī Bī であった」[MT2: 1] と述べる。一般にコーカンド・ハーン国の初代君主は後代の歴史書、とりわけ 1872 年に完成したムッラー・ニヤーズ・ムハンマド・イブン・アシュール・ムハンマド Mullā Niyāz Muḥammad ibn 'Ashūr Muḥammad 著『シャールフ朝史 *Tārīkh-i Shahrukhī*』に基づいてシャールフとするのが定説である [TSh: 17-19]³¹⁾。しかし、『選史』では

30) 例えば、「シャイバーン朝は、彼らの数は 12 人、統治期間は 100 年だった būd。」[MT1: 276]、

「アシュタルハン朝は、彼らは 10 人だった būdand。統治期間は 160 年だった būd。」[MT1: 306]

31) 『選史』の後、王朝史は『シャールフ朝史』まで書かれなかった。シャールフを初代とする説は、

シャルフはラヒーム・ハーン之父として名が挙げられるのみである。別の箇所でも「ラヒーム・ハーンの子孫たちが繁栄した」[MT2: 167], 「ラヒーム・ハーンの家系の実り, スルターン・マフムード・ハーン」誕生 [MT2: 168-169] などと, 後代の君主たちをラヒーム・ハーンの子孫と位置づけている点特徴的である。

『選史』の同時代史は中途半端に終わる。第11節はアミール・ナスル・アッラーのホラズム遠征で終わり, 第12節は「ミンの家系の政権は断絶し, マンギトの支配が始まった」[MT2: 642] 後, 「シェール・アリー・ハーンが統治の王座に座り, 政権は再びミンの家系のものとなり」[MT2: 646], シェール・アリー・ハーンがアーリム・ハーンの子のアタリク・ハーンを殺害したという記述で終わる [MT2: 659]。いずれの節にも締めくくりのような言葉はない。

したがって, 前節までの検討と併せて考えると, 著者は1258年のアミール・ナスル・アッラーによる征服前に第10節までを書き終えており, 存続している王朝としてコーカンド・ハーン国史を最後に位置付ける予定であった。しかし, 第12節を書き始めた時にはムハンマド・アリー・ハーンは死亡していた。『選史』全体の執筆開始の直接的な契機ははっきりしないが, コーカンド・ハーン国史の執筆開始時の見通しは, 滅亡した王朝史をまとめることであったはずである。

4 マッカ巡礼旅行記

『選史』のコーカンド・ハーン国史には, 著者の旅行記が含まれている。著者はマッカ巡礼旅行において, 様々な稀有な体験をした。アミール・ナスル・アッラーをはじめ, 周囲の人々との間でも必ずやそれは度々話題になったであろう。ここでは, 著者自身の旅行記についての認識を検討する。著者は, 旅行記部分の冒頭で次のように説明する。

「雄弁にして見識ある方々に隠されることがなきよう。寄る辺ない私は7年間, 世界の諸地方を旅して回った。そして世界の不思議と驚異を数多く目撃した。それを書き記したいと思った。目撃したので話は長くなるものの, しかし, この本に自分の冒険が記されないことも望まなかったのでやむを得えまい, 千に一つを手短かに説明しよう。」[MT2: 334-335]

前述したように, 著者のマッカ巡礼は国外追放の口実であった。当時それは権威ある人物を政権から抹消するためによく用いられた手段であった。『選史』序文における「辛苦と失望の沙漠の放浪者」という言葉にもあるように, 巡礼は寄る辺ない放浪の旅でもあったのである。それでも著者はマッカを目指し, 寄り道を好まなかった。道中, 著者がオレンブルグで皇帝アレクサンドル一世と面会した際, 皇帝は著者から中央アジア情勢について詳しく話

↘ 『シャルフ朝史』に初めて現れる [Beisembiev 2009: 494]。しかし, 『シャルフ朝史』も初期のコーカンド・ハーン国史に関して『選史』を利用しており, その点で早くから初期史に関しては利用価値が低いと評価されていた [Khurshut 1988: 68-69]。両史料の内容の相違点についてはより慎重な検討が必要である。

を聞き、さらに首都ペテルブルグにくるように誘うが、著者は巡礼を理由に断っている [MT2: 375-376]。

一方で、巡礼後に帰るところのない著者は、1826～27年頃には、カイロ滞在中にワズィールの息子が西洋技術を学ぶために7年間のヨーロッパ留学に出かけると知り、同行しようとした [MT2: 461]。しかし、同じ頃、カイロの市場である情報を聞いて取り止めた。それは、コーカンドで彼の一族と親交のあった「カシュガル・ホージャ家」の末裔ジャハーンギール・ホージャ Jahāngīr Khwāja³²⁾が、清朝統治下のカシュガルに「聖戦」をしかけ、成功して一帯を支配しているという情報であった。著者は、すぐに中央アジアに戻ることにした [MT2: 461-463]。

これらの記述からは、往路はただマッカ巡礼を目指し、復路はカシュガルのジャハーンギール・ホージャの政権に合流する希望を持っていたことがわかる。彼が冒頭で述べる世界の不思議や驚異、冒険として述べられているのは、道中で目撃した珍しい景色、整然とした街並み、砂漠を通過したり強盗に会うなどの九死に一生を得るような危険な体験である。ロシアの街々で技術や文化水準の高さに驚嘆したり、ロシア帝国によるコーカサス征服戦争とそれに対するムスリムの抵抗をも目の当たりにしたが [MT2: 383-385]、旅行記においてそれらを故郷の状況と対比させる視点はほとんど窺えず、中央アジアの後進性を指摘するような意図はなかったものと考えられる。

お わ り に

『選史』執筆後のムハンマド・ハキーム・ハーンの話は知られておらず、彼が他に著作をした形跡もないが、『選史』はその豊かな内容ゆえに『シャルフ朝史』などの歴史書やコーカンド・ハーン国史研究によく利用された。実際に『選史』の写本数はコーカンド・ハーン国史料の中では最も多く、またペルシア語からチャガタイ語に翻訳された唯一の作品でもあることから、よく読まれた作品であると考えられる³³⁾。

その理由としては、著者が出自と経歴ゆえに多くの事件を直接知り得たこと、教養と向学心を持ち、鋭い観察力で目撃した出来事を適切に評価していること、独立した立場からハーンたちの歴史を率直に描き得たことが挙げられる。著者は、ペルシア語の普遍史編纂の伝統

32) ジャハーンギール・ホージャはウラテバに滞在していたところ、ウマル・ハーンによりコーカンドに連行された後、著者の父の保護のもとで亡命生活を送っていた [MT2: 145, 182-183, 196-200, 211]。

33) ベイセンビエフによると『選史』の次に写本数が多いのは『シャルフ朝史』で9写本が現存する。なお、ベイセンビエフは『選史』の写本を12点とするが、ごく一部分の写しを含めるほか、分冊と思われる2冊を別途計上しているためである [Beisembiev 2009: 108, 136]。『選史』はかつてチャガタイ語で書かれてペルシア語に訳されたと考えられたこともあったが [Khurshut 1986a: 42]、本稿で明らかにした歴史書の編集の事実からその説は完全に否定される。

に則り、『高貴なる諸学問』に基づき、中央アジア史を編集した。ブハラ・アミール国史とコーカンド・ハーン国史は口承や記憶に基づくため、年代は正確でないものの、事件の因果関係や人と人との関係については的確に記述されている。君主とサイド家、コーカンドとブハラ、両国とその周辺の独立政権の関係性など、当時の社会的状況が生き生きと描かれているのである。

主要部分であるコーカンド・ハーン国史は、著者を国外に追放したムハンマド・アリー・ハーンを批判的に述べているために、著者の回想録であるかのような評価を受けてきた。しかし、このようなムハンマド・アリー・ハーンへの態度は『選史』が書かれた時期と状況に起因すると思われる。著者はムハンマド・アリー・ハーンが殺害されてコーカンド・ハーン国がブハラ・アミール国に併合された直後にこの部分を執筆していたため、必然的に国の滅亡の原因をムハンマド・アリー・ハーンに帰すことになったのである。

さらに著者は、コーカンド・ハーン国の歴史をナクシュバンディーヤの指導者である自身の一族との関係で捉えていた。ナキープの職にあった著者は、シャイフ・アルイスラームであった父とともに、コーカンド・ハーン国のイスラームの秩序を守るべき立場にあった。ムハンマド・アリー・ハーンへの批判の一部はそのような観点から考えることができる。総じて『選史』は、君主の行為がイスラーム的に見て是か非かにより評価している点も大きな特徴である。

ところで、『選史』においてラヒーム・ハーンが初代と見なされている理由は定かではないが、執筆傾向に鑑みると、著者の一族がはじめにハーン家と関係を持つ契機となったのがアイ・チュチュク・アイムとラヒーム・ハーンの婚姻であること、一族の先祖のうちはじめにアルトゥク・ホージャがフェルガナに到来した時期もラヒーム・ハーンの統治期であったことが理由として考えられる。シャルフがどの程度政治権力を掌握していたのかは、別に考察しなければならない問題であるが、著者はコーカンド・ハーン国史の起点を両家の関係の始まりと重ねていた可能性がある。一方で、『シャルフ朝史』が『選史』を利用しているにも関わらずラヒーム・ハーンを初代としなかったのは、執筆を命じたフダーヤール・ハーン Khudāyār Khān（在位 1845～58, 1862～63, 1865～75 年）はじめシェール・アリー・ハーン以降の君主たちがラヒーム・ハーンの子アブド・アルカリーム・ビーの子孫であるため王朝の系譜を合理的に説明しにくいと言う理由が考えられる。ナルボタ・ビー以降ムハンマド・アリー・ハーンまでの君主たちもアブド・アルカリーム・ビーの子孫であるが、同時にラヒーム・ハーンの子孫でもあるため『選史』のように説明することができるのである。コーカンド・ハーン国史を考えるにあたっては、1842 年の前後において、君主の家系とその後盾となる集団が大きく変化したことがより留意されるべきである。

ロシア帝国の直接的な脅威がなかった時期に書かれた『選史』は、後のジャディードたちの著作のように、中央アジアにおける政治的停滞や無益な争いについて指摘したり、読者を啓蒙するような視点は見られない。それでも、ロシア帝国やオスマン帝国の先進性を伝える

先駆けの作品であることには変わらない。後のロシア帝国統治期に『選史』の写本がいくつも作成されたのは、あるいは『選史』の価値がその頃に再確認されたためかもしれない。著者ムハンマド・ハキーム・ハーンが後に「啓蒙家」と紹介されているのは [O'zSE 1980: 360], このような『選史』の読者による評価であろう。

参考文献

- RS: Mir Muḥammad bin Sayyid Burhān al-Dīn Khāwand Shāh, al-shahīr ba Mir Khwānd, *Tārīkh-i rawḍat al-ṣafā: dar sada-yi nuhum-i hijrī*, vol. 1-7, Qum, 1338-1339.
- MT1: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārikh: Selected history*, ed. by Yayoi Kawahara and Koichi Haneda, vol. 1, Tokyo, 2009.
- MT2: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārikh: Selected history*, ed. by Yayoi Kawahara and Koichi Haneda, vol. 2, Tokyo, 2006.
- MT-D1: Мухаммед Хакимхан, *Мунтахаб ат-таварих*, подготовка факсимильного текста, введение и указатели А. Мухтарова; ответственный редактор М. С. Асимов, кн. 1, Душанбе, 1983.
- MT-D2: Мухаммед Хакимхан, *Мунтахаб ат-таварих*, подготовка факсимильного текста, введение и указатели А. Мухтарова; ответственный редактор М. С. Асимов, кн. 2, Душанбе, 1985.
- MT-S: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārikh*, Санкт-Петербургский Институт восточных рукописей Российской академии наук, No. C470.
- MT-T592: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārikh*, O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasining Abu Rayhon Beruniy nomidagi Sharqshunoslik instituti, No. 592.
- MT-T594: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Muntakhab al-tawārikh*, O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasining Abu Rayhon Beruniy nomidagi Sharqshunoslik instituti, No. 594.
- MT-T1560: Muḥammad Ḥakīm Khān, *Intikhāb al-tawārikh*, O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasining Abu Rayhon Beruniy nomidagi Sharqshunoslik instituti, No. 1560.
- NF: Shams al-Dīn Muḥammad ibn Maḥmūd Āmulī, *Nafā'is al-funūn fī 'arāyis al-'uyūn*, ba-taṣḥīḥ wa pāwaraqī-yi Āqā-yi Ḥājj Mīrzā Abū al-Ḥasan Sha'rānī, vol. 1-3, [Tīhrān], 1381.
- O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasining Abu Rayhon Beruniy nomidagi Sharqshunoslik instituti, No. 3404.
- TM: Muḥammad Yūsuf Munshī, *Tadhkira-yi Muqīm-khānī: sayr-i tārikhī, farhangī wa ijtimā'ī-yi Māwarā' al-nahr dar 'ahd-i Shaybāniyyān wa Ashtarkhāniyyān (906-1116 h.q.)*, muqaddama, taṣḥīḥ wa taḥqīq-i Farishta Ṣarrāfān, Tīhrān, 1380.
- TR: Mir Sayyid Sharīf Rāqim Samarqandī, *Tārīkh-i Rāqim*, ba kūshish-i duktur Manūchihr Sutūdah, Tīhrān, 1380.
- TSh: Mullā Niyāz Muḥammad bin Mullā 'Ashūr Muḥammad Khūqandī, *Ta'rikh-i Shahrukhi*, ba-sa'ī

wa ihtimām-i Nikulā Pāntūsuf, Qāzān, 1303.

- Abdurrahman-i Tali' (1959) : Абдуррахман-и Тали', *История Абулфейз-хана*, перевод с таджикского, предисловие, примечания и указатель А. А. Семенова, Ташкент.
- Babadžanov, Baxtiyor (1996) : On the History of the Naqšbandiya Muğaddidiya in Central Māwarā'annahr in the Late 18th and Early 19th Centuries, *Muslim Culture in Russia and Central Asia from the 18th to the Early 20th Centuries*, ed. Michael Kemper, Anke von Kügelgen and Dmitriy Yermakov, Berlin, 385–413.
- Bartol'd (1973) : Бартольд, В. В., *Сочинения, том 8, Москва*.
- Beisembiev, Timur K. (2008) : *Annotated indices to the Kokand chronicles*, Tokyo.
- Beisembiev (2009) : Бейсембиев, Т. К., *Кокандская историография : исследование по источникововедению Средней Азии XVIII–XIX веков*, Алматы.
- Eckmann, János (1964) : Çağatay Edebiyatının Son Devri (1800–1920), *Türk Dili Araştırmalar Yıllığı Belleten* 1963, 121–156.
- Hakimxon (1966) : Ҳақимхон, *Хотиралар. (Саёҳатлар ва саргузаштлар)*, нашрга тайёрловчилар : Ҳолид Расул ва Махбуба Қодирова, Тошкент.
- Havemann, A. (1993) : Naḳīb al-Ashrāf, *Encyclopaedia of Islam, second edition*, vol. 7, Leiden, 926.
- Istoriia Samarkanda (1969) : *История Самарканда*, ответственный редактор И. М. Муминов ; редакционная коллегия В. А. Абдуллаев ... [и др.], т. 1, Ташкент.
- Istoriia Uzbekistana (2012) : *История Узбекистана : XVI – первая половина XIX века*, ответственный редактор, Д. А. Алимова, Академия наук Республики Узбекистан. Институт истории, Ташкент.
- Kawahara, Yayoi (2015) : The Development of the Naqshbandiyya-Mujaddidiyya in the Ferghana Valley During the 19th and Early 20th Centuries, *Journal of the History of Sufism*, 6, 139–186.
- Khurshut (1984) : Хуршут, Э., Источниковедение, «Мунтахаб ат-таварих» как источник по истории Средней Азии и сопредельных стран XVIII–XIX веков, *Общественные науки в Узбекистане*, 1984/7, 41–45.
- Khurshut (1985) : Хуршут, Э., Источниковедение, «Мунтахаб ат-таварих» и история его изучения, *Общественные науки в Узбекистане*, 1985/2, 59–63.
- Khurshut (1986a) : Хуршут, Э., Источниковедение, «Мунтахаб ат-таварих» и его списки, *Общественные науки в Узбекистане*, 1986/5, стр. 41–45.
- Khurshut (1986b) : Хуршут, Э., Источниковедение, «Мунтахаб ат-таварих» и его источники, *Общественные науки в Узбекистане*, 1986/12, 39–44.
- Khurshut (1987) : Хуршут, Э., *Ҳақимхоннинг ҳаёти ва саёҳатлари*, Тошкент.
- Khurshut (1988) : Хуршут, Э., Источниковедение, От компиляции к первоисточнику (на примере источниковедческого анализа «Мунтахаб ат-таварих»), *Общественные науки в Узбекистане*, 1988/4, 66–70.

- Khurshut (1989) : Хуршут, Э., *Ҳакимхоннинг Дўст Муҳаммадхон ҳақидаги эсталари*, Тошкент.
- KSH (2002) : *Katalog sufischer Handschriften aus der Bibliothek des Instituts für Orientalistik der Akademie der Wissenschaften, Republik Usbekistan*, zusammengestellt von Baxtiyar Babadjanov ... [et al.]; Software-Entwicklung, Computersatz, Ulrike Berndt, Hindol Madraimov; Redaktion, Baxtiyar Babadjanov ... [et al.]; Herausgeber, Jürgen Paul, Stuttgart.
- Kügelgen, Anke von (1998) : Die Entfaltung der Naqšbandiya Muğaddidiya im mittleren Transoxanien vom 18. bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts: Ein Stück Detektivarbeit, *Muslim Culture in Russia and Central Asia from the 18th to the Early 20th Centuries, vol. 2, Inter-Regional and Inter-Ethnic Relations*, ed. Anke von Kügelgen, Michael Kemper and Allen J. Frank, Berlin, 101-151.
- KVR (1989) : *Каталог восточных рукописей Академии наук Таджикской ССР*, под редакцией и при участии А. М. Мирзоева и А. М. [i. e. А. Н.] Болдырева, т. 6, Сталинабад.
- Levi, Scott C. (2017) : *The rise and fall of Khoqand 1709-1876: Central Asia in the global age*, Pittsburgh.
- Miklukho-Maklai (1975), Миклухо-Маклай, Н. Д., *Описание таджикских и персидских рукописей института востоковедения*, Москва.
- Nalivkin (1886) : Наливкинъ, В., *Краткая исторія : кокандскаго ханства*, Казань.
- O'zSE (1980) : *Ўзбек совет энциклопедияси*, бош муҳаррир, Мўминов И. М.; бош таҳрир хайъати аъзолари, Абдуллаев, В. А. ... ва бошқ., т. 14, Тошкент.
- SVR-1 (1952) : *Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР*, под редакцией и при участии А. А. Семенова, т. 1, Ташкент.
- SVR-3 (1955) : *Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР*, под редакцией и при участии А. А. Семенова, т. 3, Ташкент.
- SVR-i (1998) : *Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан, история, точные и естественные науки, медицина*, Ташкент.
- 大塚修 (2017) 『普遍史の変貌：ペルシア語文化圏における形成と展開』名古屋大学出版会.
- 河原弥生 (2008) 先行史書『ラーキム史』からの翻訳に関する一考察 ジャリロフ・アマンбек, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直 (編) 『『ターリーヒ・ラシーディー』 テュルク語訳附編の研究』ウズベキスタン共和国科学アカデミー アブー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所, 東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センターイスラーム地域研究部門, NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点, 12-24.
- 河原弥生 (2019) ワリー・ハーン・トラ：コーカンド・ハーン国滅亡期におけるマルギランのスーフィー聖者 野田仁・小松久男 (編著) 『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社, 140-164.
- 澤田稔 (1996) ホージャ家イスハーク派の形成——17世紀前半のタリム盆地西辺を中心に『西南ア

ジア研究』45, 39-61.

バルトリド (2011) 小松久男 (監訳) 『トルキスタン文化史』1, 平凡社.

(東京大学附属図書館)